

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年より神奈川県産婦人科医会との協力事業として、県下の医会会員診療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について検鏡・判定を行ない、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車健診が行政主導で行われているのに対して、神奈川方式は産婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものである。

検査数、受診者数とも近年減少を続けていたが、11年度を底に増加に転じた。しかし、検体送付医療機関は頸部69、体部57機関であり、今後医療機関の拡大が課題である。

精度管理に関しては、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部によって行われ、県産婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

神奈川方式がん検診は神奈川県産婦人科医会との協力事業としてスタートした。従って実施方法については昭和53年に日母がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化(日母方式)への答申によっている。従って対象婦人の年齢は一応30歳以上としながら既婚婦人ではその限りでない。がん検診のみを目的として受診した婦人についても通常の婦人科的診察を行うこと、コルポスコープを初回から細胞診と併用して使用することが奨められている。採取器具も最近では綿棒に代わってサイトピックが採用されている。

体がん検診は、頸がん検診受診者の内、年齢50歳以上のもの、閉経以後のもので問診で不正出血を訴えたことのあるものを中心に内膜細胞診を行っているが、細胞採取法はエンドサイト法、吸引法、ブラシ法などが用いられていて統一性はない。

子宮頸がん検診

平成13年度の子宮頸がん検診受診者は27,868名であった。がん確定者は84名(発見率0.30%)、内訳は頸がん

68名、体がん8名、その他がん3名、再発転移がん5名であった。その他のがん3名の内訳は外陰がん1名、卵巣がん2名、再発・転移がんの内訳は体がん再発2名、卵巣がん再発2名、頸部腺がん再発1名であった。

年齢階級別頸がん確定数では、29歳以下5名、30歳代28名、40歳代16名、50歳代13名、60歳代14名、70歳以上8名であった。29歳以下と30歳代の受診者数が9,929名、がん確定数33名(発見率0.33%)に対し、40歳以上の受診者数は17,939名、がん確定数51名(発見率0.28%)であって、総受診者数の35.6%である30歳代以下の層で高い確定率がみられた。又30歳代以下で発見された頸がんの病期が、33例中〇期20名、Ⅰa期3名、Ⅰb期4名、Ⅱ期以上3名に対し、40歳以上では51症例中〇期18名、Ⅰa期3名、Ⅰb期8名、Ⅱ期以上8名であって、高齢者ほど進行がんでの発見が多い傾向がみられた。又頸部腺がんについては平成11年度3名、平成12年度7名が発見され増加傾向がみられたが今年度は1名(30歳代)であった。

異形成については、確定者数185名(発見率0.66%)、内訳は軽度異形成87名、中等度異形成71名、高度異形成27名であった。年齢階級別異形成確定数では、30歳代以下90名(発見率0.91%)、40歳代以上95名(発見率0.53%)であって、特に若年層に対して検診に誘導することの重要性が明確である。

子宮体がん検診

平成13年度の体がん検診受診者数は8,039名、頸がん検診受診者の28.8%であった。平成10年度以降、受診者数は漸増傾向にある。がん確定者は30名(発見率0.37%)であった。内訳は子宮体がん26名(内1名は卵巣がんとの重複がん)、その他の悪性腫瘍4名で、卵巣がん3例、卵管がん1名が含まれていた。

内膜増殖症確定者は15名(発見率0.18%)であった。年齢階級別体がん並びに内膜増殖症確定数は、29歳以下0-0名、30歳代2-0名、40歳代1-8名、50歳代15-6名、60歳代11-0名、70歳代1-1名であった。発見された体がん30例の病期は、〇期2名、Ⅰ期18例、Ⅱ期以上5名、病期不詳1名であった。

関係の集計表は119～121頁に掲載